

ジュビリー (Jubilee) のときを迎えて

名誉団委員長 杉原 正

(はじめに)

今年4月から18歳を成人とする法律改正があり、ベンチャー年代でも成人になることもあり、時代や社会、そして青少年の成長の変化を感じます。

霊南坂教会でのボーイスカウト活動の始まりは、1947年2月22日、(2月22日は創始者ベーデン・パウエルご夫妻の誕生日でもあります)今年で創立75年になります。

欧米では、10年区切りの節目だけでなく、25年を区切りとする「ジュビリー」としての祝い方があります。25年を Silver Jubilee, 50年を Gold Jubilee、そして75年を Diamond Jubilee としており、霊南坂スカウトは、今年ダイヤモンド・ジュビリーの年を迎えました。

東京港第1団(東京第4隊・東京第4団)は、ガールスカウト東京都第4団と共に、折々のジュビリーのとき、とくに神様やご協力いただいた方々に感謝して礼拝や記念の集いなどを行ってきました。

また、今年は、ボーイスカウト日本連盟がその前身である少年団日本連盟として1922年4月に組織化されて100年目を迎えます。

イギリスでベーデン・パウエル(以下B-P)によって1907年ロンドン近郊のプール港に浮かぶブラウンシー島で20人の少年を集めて“実験キャンプ”のあと、1908年、B-Pによって「スカウティング・フォア・ボーイズ」(Scouting for Boys)が著わされ、その後イギリスだけでなく世界にスカウト活動が伝播されました。

日本への伝播(日本でのスカウト活動の始まり)、そしてその後の太平洋戦争で中断していたスカウト活動の再建、また東京港第1団の創設の経緯など、この節目のジュビリーのとき、再認識しておきたいと思います。

(日本への伝播)

1908年、“スカウティング・フォア・ボーイズ”が出版され、イギリスでボーイスカウト運動が始まったことは、外交官、教員、軍人、新聞記者、宣教師、イギリス人などによって日本へ伝播されました。

ベルギー駐在、秋月左郁夫公使から日本政府や文部省にイギリスでボーイスカウト運動が始まったことが報告された。報告を受けて当時ロンドンで開催される「万国道徳教育会議」に日本代表として出席する広島高等師範学校(現在の

広島大学)の北條時敬校長に調査を依頼、翌1909年に帰国にあたり、資料や用品を日本に持ち帰ったが内閣が変わっており、日本でのスカウティングの受け入れはうまくいきませんでした。北條校長は、帰国後に付属中学校の校外活動の一つとしてスカウト運動のシステムを取り入れています。

また、1909年、文部省派遣留学生として、ロンドンにいた山口高等商業学校(現在の山口大学)の蒲生保卿教授は帰国にあたりスカウト関係の書籍などを持ち帰り、首相や文部大臣に提出したが、スカウト活動の実現には至りませんでした。

同じく1909年、「静岡公報」深尾韻記者は、英字新聞でB・Pのスカウト運動を知り“スカウティング・フォア・ボーイズ”を取り寄せ研究したが東京に転勤、1914年に静岡に戻り、イギリスのボーイスカウトを範としての「静岡少年団」の活動を始めます。

1911年、ボーイスカウト運動に関心のあった乃木希典大將は、イギリス皇帝ジョージ5世の戴冠式に随行者の一人として東郷平八郎海軍大將と共に出席し、そのあとボア戦争の総司令官であったキッドナー元帥(Once a Scout, always a Scoutの名句)の紹介でB・Pと会見し、スカウトの集会などを視察します。帰国後、学習院々長に就任していた乃木大將は、学生達にボーイスカウト印象を語っており、また学習院の夏期遊泳では片瀬海岸において3週間のテント生活を学生にさせています。

この乃木校長時代に薫陶を受けたのが後に日本のボーイスカウト運動の核となる三島通陽、二荒芳徳、佐野常羽の先哲がおられました。

(全国各地で少年団活動が始まる)

日本に様々なルートでボーイスカウト運動が伝播されるなか、全国各地で少年軍団、少年団、少年義勇軍などの名称での少年団としての活動が始まりましたが、その多くはB・Pが提唱されたスカウト方式によるものではなかったことが推測されます。

各地で発足した少年団活動のいくつかを紹介します。

<東京> 1913年10月、東京では小柴博、日野鶴吉らが、はじめて「東京少年軍」を組織しました。翌1914年9月、「東京少年団」と名を改めて九段の偕行礼で結団式を挙げています。

小柴は、青少年教育の分野で活動する「修養団(現在、代々木に本部)」が行う“精神教育幼年会”の主任をしていました。修養団は蓮沼門三が創設した団体で、赤坂小学校の訓導(教師)であった蓮沼の同僚の小柴らは近隣の児童を集め、

お伽話に精神的な訓話を加えて文化活動を展開していました。蓮沼が本野一郎駐露大使より欧州諸国のスカウト運動の実情と日本でも取り入れるよう勧められ、小柴はすぐに幼年会の別動隊として「東京少年軍」を組織し、翌1914年少年軍は、修養団から離れて「東京少年団」を発足させます。

<静岡> 1914年8月、前述の(日本への伝播)で紹介した深尾韶が独力で「静岡少年団」の創設をはかり、浅間神社で発団式を行っています。翌1915年には「少年軍団教範」を中央報徳会から出版し、同書は「スカウティング・フォア・ボーイズ」の単なる翻訳ではなく、研究した結果の日本の土壌に合うような解説したものです。

10年後の1925年9月、スカウト向け(当時は少年健児用)に「スカウト読本」を著作し、少年団日本連盟から発刊しています。

1915年、同じ静岡県沼津市で「岳陽少年団」が発足します。前年の1914年、木下秀四郎が近隣の農家の子どもを集めて、「正気隊」(子どもを教育する修養会として)として始まり、上香貫軍少年団、沼津少年団を経て退役陸軍少将 渡辺水哉を団長として活動をすすめます。1918年には、後に総コミショナーとなる二荒芳徳が名誉団長に就いています。深尾は、この団の活動を支援しています。

<京都> 1915年11月、「京都少年義勇軍」の結団式が平安神宮で行われ、総監に陸軍中将 内藤新一郎、隊長 渡辺利三郎が発足したが、その中心人物は中野忠八(第5代総長 久留島秀三郎の実兄で、戦後の「ちかい」と「おきて」の草案者で強く「副文」を作成することを提言しました)でした。

中野は、日本でスキーを試みた最古参の一人で日本山岳会員でもあり、ボーイスカウト関係の原書によって純正なスカウト活動を自ら行いました。

<北海道> 1915年11月、「京都少年義勇軍」と同じくして「旭川少年団」を宇都宮喜太郎が組織し、1,000名を超える団員となり、身体の鍛錬を主とし、精神修養にも努めた。1916年6月には、下田豊松が同じく岩内で「岩内少年団」を結成しています。下田は前述の東京少年団の小柴博、そして後述の横浜のグリフィン隊(日系外人として加わっていた)のスカウト、リチャード鈴木と共に、1920年イギリス・ロンドンで開催された第1回国際(世界)ジャンボリーに日本代表として参加しています。(この当時は、まだ日本全体の組織が構成されていない)

<石川> 1915年7月、「金沢少年義勇団」が93名の入団者をもって組織されています。

<愛媛> 1917年、松山市で組織された「土犬団」という名称の少年団、これは和洋の特性をいかした「土佐犬」からとったもので、1921年に新たにボーイスカウトの班制を採用しています。

<東京> 1922年、「少年団日本連盟」が組織されたとき、三島通陽（後に第4代総長）は1919年に「千駄ヶ谷青年団」、翌年に「文化青年会」を併設し、この中に「少年部」を設けた。この少年部を「少年団日本連盟付属少年団」（弥栄ボーイスカウト）として組織し、自ら団長となり、隊長に竹内（内田）二郎として発足しました。

日本で伝播されたスカウト運動の中で“ボーイスカウト”を明記した少年団活動では初めてであろうと考えられます。

（キリスト者によるボーイスカウト）

日本にボーイスカウト運動が伝播し、各地で少年団スタイルの活動が始まりましたが、一方でキリスト者によるボーイスカウト活動が横浜、神戸、大阪で始まっていきます。

<横浜> 横浜でのボーイスカウトは、イギリス人で敬けんなクリスチャンで横浜海岸通りで貿易商を営んでいた クラーレンス・グリフィンは、早くからボーイスカウトの組織を志し、1911年12月にイギリス、アメリカ、デンマーク、ノルウェーの18人の少年たちを集めて発隊し、国際登録も済ませていました。

翌1912年4月、B-P はみた夢での聖ペトロの啓示で日本を訪れたとき、横浜港でB-P を出迎えたのがこのグリフィン隊のスカウト達で大変驚かれたと伝えられています。

C.グリフィンは、太平洋戦争で日本を一時離れていましたが、戦後の1950年に東京第4隊（現東京港第1団）の3周年の祝会に創立者の一人であるマーチン・ウィリアムズに招かれて出席し、記念写真にも収まっていますが同年急病で亡くなり、横浜の外人墓地に埋葬されています。

<神戸> 1912年3月、神戸在住の宣教師フレデリック・ウォーカーがイギリス、アメリカの少年たちを中心に27名でスカウト活動を始めており、B-P の日

内庁のスタッフであった二荒芳徳（後に総コミショナーなどに就任）であったといわれています。

また、後に天皇陛下は折々にボーイスカウトを日本に紹介したのは自分だといわれていた、と伝えられています。

全国の組織化に最も熱心だったのは静岡でしたが、当時「東京連合少年団」の団長であった、後藤新平東京市長が推挙されて新しく組織された「少年団日本連盟」の総裁、と総長に就任します。後藤総長はかつて医療界、官界、政界で活躍されましたが次代を担う青少年の育成に傾注して全国を巡回してスカウト運動の普及に務めました。東京市長の退職金を日本連盟に寄付したことにも注目してよいでしょう。

その後、少年団活動も、政府の方針での大東亜共栄圏の設立に向け、アジア諸国において、少年団活動を始めたことにより、「少年団日本連盟」の名称を1935年7月に「大日本少年団連盟」に変更しました。また一方で、文部省の訓令として学校を母体とする「学校少年団」の設立が始まりました。

学校少年団は、少年団日本連盟を脱退した団も吸収して「帝国少年団協会」を設立し、1936年には、「大日本少年団連盟」は1,131団、10万2,497人に対して、「帝国少年団協会」には888団、28万5,406人が加盟していました。

1940年9月、文部省から青年団体と少年団体の統合が推進されて、1941年1月、ついに「大日本青年団」、「大日本連合女子青年団」、「大日本少年団連盟」、「帝国少年団協会」の4団体は統合され「大日本青少年団」（団長は文部大臣）の結成式が青山の日本青年会館で開催されました。

私たちの「大日本少年団連盟」は統合に伴い、少年団活動を休止し、財団法人としての組織を「健志会」として残すことになり、このことが戦後一番はやく青少年団体としての再建が始まります。

（戦後のボーイスカウト運動の再建）

1945年8月15日、太平洋戦争の終戦（敗戦）のとき、日本には青少年団体は存在していません。

ボーイスカウトの再建の動きは、終戦と同時に日本各地で起こったが、東京で口火を切ったのは、戦前の「大日本少年団連盟」、竹下勇第3代総長でアメリカのボーイスカウト出身である村山有（後に東京都連盟初代理事長に就く）や日系2世の鳴海重和兄弟らに声を掛けます。

竹下は、アメリカではボーイスカウトが盛んであり、日本でのこの運動に理解を得ることが容易と考え、ボーイスカウトの再建の方法と青少年の教育をしたいと思っていました。

一方、京都、大阪においても新らしい「ちかい」と「おきて」の草案に関わった中野忠八、神戸の須磨で日本で初めてウルフ・カブを始めた古田誠一郎、後に大阪連盟の理事長となった今田忠兵衛、スカウト関係書籍の翻訳をした中村知らの熱望者が同地方駐留の GHQ のスタッフでアメリカの元ボーイスカウトである H.M.フェッターらと談合して相互理解を深め、再建気運を盛り上げていることが東京側にも通報されていました。

また、1945年11月、戦前に日本のYMCAの主事を務めていた R.L. ダーギンが GHQ の顧問の一人として再来日した歓迎会を兼ねた講演会が神田の YMCA 講堂で行われました。

その折、内田（竹内）二郎（戦前の三島通陽団長の弥栄ボーイスカウト隊長）は、村山や鳴海らと会い、GHQ の中にはボーイスカウト関係者や2世スカウトがかなりいることが分かりました。三島に相談をし、1946年2月に銀座・交詢社ビルで第1回ボーイスカウト・クラブの会合を開き、2回目からは品川の森村学園（後に、指導者のラウンドテーブルなどの会場としても）で会合を続けます。

この会合には、日系2世やCIEのダーギン主任なども参加するようになりましたが、再建に関しては、戦前の少年団活動の一部が軍国的な動向であったことに難色を示していました。

しかし、関係者の熱意に促されてCIEは、①制服を着用しない。②スカウトサインのみで敬礼をしない。③号令をかけない。行進をしない。などの許可条件、更に、その中央組織が日本の「公法人」であるとの了解のもとに、正式な日本のボーイスカウト運動の再建を承認したのは1947年12月4日でした。

その結果。実験隊として東京で5ヶ隊、横浜で1ヶ隊を発足させることになり、東京第4隊（現東京港第1団）が霊南坂教会でGHQのマーチン・ウィリアムズと通訳も務めていたハワイでボーイスカウトであった日系2世の今井襄二が、それぞれスポンサーと隊長を引き受けて1947年2月22日に発足しました。

（マーティン・B・ウィリアムズと今井襄二）

ボーイスカウト東京第4隊（現東京港第1団）の創設に関わったM・ウィリアムズと今井襄二、そして小崎道雄牧師については忘れるとのできないとても大切な人たちであります。

ウィリアムズと今井襄二のお二人は、霊南坂教会でのスカウト活動の創設に関わったのみでなく、日本のボーイスカウト運動の再建後の日本連盟での働きは、とても大きいものになっています。

M.ウィリアムズは、1946年4月、GHQの経済科学局の職員として2年の任期で来日しています。霊南坂教会でのスカウト活動の創設に深く関わり、その後

はスポンサーとして支え続けるなか、再建後のボーイスカウト運動を支援されています。「日本ボーイスカウト運動史」のなかで次のような紹介文が掲載されています。

「GHQ の日本ボーイスカウト基金募集委員会委員長マーティン・B・ウィリアムズは、GHQ の経済科学局職員としてわが国に着任すると直ちに、折から再発足したわが国ボーイスカウト運動の援助を申し出て、東京第4隊を今井襄二と共に結成し以来、激務のかたわら、日本連盟再建諮問委員として、あるいは財政援助者として尽力した人である。しかもボーイスカウトのために任期を延長すること3度に及んでおり、わが国のスカウト運動が再建の基礎を固め伸展の道をたどるようになったのは、ウィリアムズ委員長の献身によるところが大きい。ことに自ら率先して日本ボーイスカウト基金募集委員長となり、実に千数百万円を達成した功德は特記しなければならない。1952年12月11日、帰国するウィリアムズに「名誉理事」の称号を贈ると共に、新たに制定した日本連盟最高功労章である「きじ章」第1号を贈呈した。

一方、今井襄二は、日系2世で、ハワイ州ホノルルでボーイスカウトの経験があり、太平洋戦争で帰国して、海軍の士官候補性となり、終戦後はGHQ関係の仕事でM.ウィリアムズと知り合い、通訳も務めながら東京第4隊を共に立ち上げ、自ら隊長としてスカウトの指導にあたります。

スカウト活動には厳しく、B-Pに習って(中産階級と労働者の子弟を混合して実験キャンプを行う)。生育環境の異なる少年たち(霊南坂教会の日曜学校の生徒と公立小学校の児童を混成して隊を作り上げる)で霊南坂スカウトを創立した意義は大きいと思います。

隊長の期間は短く、1948年7月、戦後のスカウト運動の基本原則などの協議のため初めて開かれた臨時地方理事総会に、今井は事務局指導主事として参画しています。その後は指導主事として開設される公認指導者講習会など指導者養成のため講師として全国各地に出向いています。

1949年の秋に、指導主事としてアメリカ・スカウト連盟の専従指導者養成コースのある大学に留学し、その間1950年6月に開催された第2回全米ジャンボリーに日本代表として参加しています。

期間中の7月1日にボーイスカウト日本連盟の国際事務局への復帰が認められ、記念して今井の手により国旗(日の丸)が戦後初めて外国の空にあがったことが記事として残っています。

(おわりに)

四季折おり、移り行く自然のなか、日本では中国伝来の陰暦の季節区分の「二十四節」があります。5月5日は「立夏」ですが、現在は“子どもの日”が一般的な節目の祝い方になりましたが、その折おりの装いを新たにしています。

今年、霊南坂教会でボーイスカウト活動が始まって75年、ボーイスカウト日本連盟の前身である「少年団日本連盟」が組織されて100年の節目、「ジュビリー之年」を迎えました。

人の歩みも、組織や団体の歴史のなかにあっても、それぞれの節目のとき、感謝して祝い、また新たな出発の機会としています。

日本には、数多くの青少年教育や育成に関わる団体がありますが「学校」に喩えれば、青少年団体は、「私立学校」といえると思います。私立学校が、私立学校と胸を張って、またその根拠となるのは、創設者たちの「建学の精神」であります。

私立学校が建学の精神を喪失したときは、その私立学校の存在意義は無くなると考えます。

「先ず神の愛、ありき」創始者 B-P のキリスト教精神に基づいたスカウト運動、そして共鳴し、支えた草創期の先人たちの想い、をいま私たちは、どのように継承し、真摯に受け継ぐ覚悟を新たにするときではないでしょうか。

人の歩みも、組織や団体の歴史も長い階段をのぼり続けることが大事であり、長い階段には途中でひと休みする「踊り場」が設けられています。今その節目の踊り場に私たちはいます。この「踊り場」でしばし佇み、来し方を顧み、行く末を見つめるよい機会です。

コロナ禍の続く試練とのき、来た道をしっかりと顧みることとは、この階段の下から後に続くスカウトたちがのぼって来て居ることを決して忘れてはならないからです。併せて行く先を見定めて正しく導いていくことの実感を感じなければなりません。

B-P が終焉の地、ケニヤのニエリで、ケニヤ山が自分にこう語り掛けているといった言葉“視野をより広く、より高く、より遠く、前を見なさい。そうすれば道が開かれるでしょう。”を読み解きましょう。

また、霊南坂教会でのスカウトの生みの親といわれる小崎道雄牧師が口癖であった、「さあ、みんなで一緒にやりましょう」の言葉が思いだされます。

このジュビリーのとき、“さあ、みんなで一緒にやりましょう”

2022年5月6日

(ボーイスカウト日本連盟顧問・先達)

(参考書籍)

- 「少年団の歴史 -戦前のボーイスカウト・学校少年団-
上平泰博・田中治彦・中島純 萌文社
- 「ボーイスカウト」 -20世紀青少年運動の原型-
田中治彦 中央公論社
- 「占領下の東京」 佐藤洋一 河出書房新社
- 「ボーイスカウトが目指すもの
- An official history of scouting -
イギリス・スカウト連盟編 山と溪谷社
- 「日本ボーイスカウト運動史」(I)、(II)
ボーイスカウト日本連盟
- 「日本ボーイスカウト東京連盟運動史」(I)、(II)
ボーイスカウト東京連盟
- 「霊南坂教会 100年史」 霊南坂教会